
虎人少年 欧州紀行記

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虎人少年 欧州紀行記

【Nコード】

N4185D

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

俳優結城聡史とその付き人小林虎人少年のお話です人気ドラマのスペシャル番組撮影のため舞台は欧羅巴虎人少年扮するスーパーモデルのティグと取り巻く人々の騒動をお楽しみ下さいませ

1・虎人 欧州ロケに同行す（前書き）

お正月スペシャル（爆）帰ってきた虎人デス（笑）
ご笑納下さいませ

1・虎人 欧州ロケに同行す

1・虎人 欧州ロケに同行す

「虎人も出演するの？」

「いえ 僕はフランス語のトレーナーというかお手伝いで・・・」

「ああ あのウォンツ君の教育係？」

「そう・・・らしいです しかも頭の痛い事に・・・」

「え？」

「ティグで来いって言われてて・・・」

「へえゝっ！！いいじゃんっ！俺 ティグちゃんと一緒うれしいかもっ！」

「うおおいつ・・・」

「あ・・・ジョークです・・・でも何でティグ？」

「ティグはフランス語ぺらぺらだし ちょっとしたサプライズゲストだって」

「へえゝっ！ じゃあちよつと位エキストラとかもあるんだな・・・きつと」

「そうですね・・・ワンカットくらい在るらしいです」

俳優 結城聡史とその付き人であり 自らも売り出し中の若手俳優 小林虎人は

同居しているマンションのリビングでそれぞれのスーツケースに荷物を押し込みながら 今度の欧羅巴でのロケについてあれやこれやと他愛のない雑談をしている

聡史の主演する クラシック音楽が題材になったコミカルなドラマは連ドラとしては異例の高視聴率と大人気をはくし

今回 お正月のスペシャル番組として 続編が制作される事になった

「ティグで行くんだったら 飛行機とか別便？」

「さあ・・・まだ詳しい事は聞いてないんですけど 香叔母が向こうで

ついでにちよつとスチール撮影するとかなんとか言つてて・・・まだそつちのスケジュールもはつきりしないんですよ」

「虎人も大変だなあ 俳優とモデルの二足のわらじ よく頑張ってるよ うん」

「・・・ケンカ 売ってます？」

「え・・・なんで」

「僕はティグなんて一刻も早く辞めたいんですっ！！」

「世界的に有名になっちゃったスーパーモデルなのにいっ?????」

「だからですっ！」

「まあなあ・・・実は男でしたって もう言いくいよなあ」

「・・・ういっす・・・」

小林虎人は叔母である有名デザイナー花井香の策略で女装させられその女装姿がモデルとしての高い評価を得てしまい

スーパーモデル ティグとして正体を隠して活動を強いられている

身長183センチにもなる虎人がヒールのある靴を履くと190近い大女になる

しかし キツイ大きな黒い瞳とルージュの栄える大きな口の顔立ちはどこかアンニュイで性別不明な不思議な魅力に溢れ

腰の細い体型はボーイッシュでもあり

コレクションの舞台では異色のモデルとして引く手あまたの人気者になってしまった

花井香のコレクションのトリを飾るドレスは必ずティグが着る事になつていた

それ程に 周囲に認知されてしまった今となつては
虎人は俳優としての活動とほぼ2分する程の割合で
スーパーモデル ティグとしての活動をこなしていた

そして今回 聡史のドラマがフランスでのロケを行うにあたって
出演者のフランス語指導と ドラマのサプライズゲストとして
ティグに白羽の矢が立ったのである

ドラマ製作サイドにも 小林虎人がティグであるという事実を
知る者はなく 今回も 虎人は一人 こそこそとティグとして
花井香に伴われて フランスへと向かう予定であつた

不本意な仕事な上に はつきりしないスケジュールで
虎人はかなりイライラとフラストレーションがたまっていた
その気持ちそのものといった手つきで

虎人は乱暴に荷物をスーツケースに押し込んでいった

2・虎人 生徒と対面す

2・虎人 生徒と対面す

「初めましてっ！ウォンツと申しますっ！」

「どうも・・・」

彼に会うのは二回目だ

彼は覚えてないかもしれないけど・・・というか

ティグとして会うのは初めてだから気づくはずもないか

小林虎人と結城聡史はこのウォンツ青年に以前一度会っている

彼がユニットを組んでいる小沼徹平青年の

聡史への歪んだ想いが引き起こした事件

彼は小沼青年の肩を抱き

「僕がちゃんとしてますから・・・ご迷惑をお掛けしました」

そう言つて 深々と頭を下げた

あの時の思い詰めた真剣な表情とは打って変わり

今日の前にいるウォンツ青年は

快活な人懐こい笑顔でティグこと虎人に握手を求めている

その手を握りかえしながら

虎人は複雑な想いにとらわれた

この青年が大切に想っているらしいあの小沼という青年のせいで

結城聡史の背中には大きな火傷の傷跡が残った

虎人も随分な目にもあった

仕事とはいえ こうして結城聡史と再会する事を

彼だって複雑な思いで引き受けたに違いない

まあ・・・

虎人はティグの姿なのでさして問題ないとして
結城聡史には随分と気を使う事だろう
少し気の毒にも思う

ともあれ

はじまってしまった仕事 とりかかってしまった仕事
全力でこなすしかない

虎人は 艶然とした笑顔でウォンツに微笑み
流暢なフランス語で答えた

「よろしく願いますね」

ティグの笑顔にウォンツの頬がぽつと赤らんだ

虎人は内心 その反応にぎよつとした

自分が女装した時の周囲へ与える印象だとか

その外見について

虎人は未だによく判っていなかった

自分が女性として男性から魅力的だと思われるなど
虎人には想像もつかない事だった

しかし

この瞬間 ウォンツは恋に落ちていた

3・虎人 デートに誘われる

3・虎人 デートに誘われる

「ティグ・・・よかつたら一緒に食事に行きませんか？」
ウォンツの遠慮がちな誘いに虎人は背筋をのばした
「・・・・・・・・えっ・・・・・・・・」

正直 仕事が終わればさっさと虎人に戻りたかった
一刻も早くこの化粧を落とし カツラを外してすっきりしたかった
断ろう 断ってさっさとホテルに戻って
結城さんと何か食べに行こう
そう思った矢先

虎人の視界にその結城聡史の姿が映った

「結城さあゝん 赤いダウンありがとうございますあゝ
あつたかくてえ 快適ですう お礼にお食事でも」
「え？ 気にしなくていいのに もう使わないやつだから
かえつてもらってくれて嬉しいよ」

「結城さん 優しいからあゝ 食事食事っ！ 行きましょっ！」

共演の女優に腕を組まれ にこにこ答えているその姿
虎人は心の隅で「ちっ・・・」と舌打ちをする自分に苦笑した
そして これみよがしな甘い声で
聡史にわざと聞こえるようにウォンツの誘いに答えた
「喜んで ご一緒させて頂きます」

聡史の片方の眉がぴくりと上がったのを虎人は見逃さなかった
秘かな勝利感を味わいながら
差し出されたウォンツの腕に手をからめて現場を後にした

実際 ウォンツ青年よりもティグの方がかなり背が高い

虎人は簡単な着替えをしてくるので待つていて欲しいと彼に告げると部屋に戻り ヒールの靴をかかとの低いパンプスに履き替えた

ウォンツはスマートにティグをエスコートすると

車寄せに用意させたハイヤーでパリの三つ星レストランへと連れて行ってくれた

料理は申し分なく

また ウォンツの会話は思った以上に楽しく

ティグを飽きさせないようにと心を配る様子が微笑ましく

虎人は ウォンツ青年の人柄に好意を持った

しかし 虎人であるティグはウォンツの恋に答えられるハズもなくあまり思わせぶりな態度で彼を傷つけてしまう事がないように気をつけなくては そう心に言い聞かせながら

虎人は 秘かに自分が聡史に張り合った事を反省していた

そんな事は知るよしもないウォンツは

実に楽しそうにニコニコと人好きのする笑顔で

終始ティグに対して紳士的であり申し分のないエスコートだったホテルまで送り届けられ

部屋へ無理矢理押し入るような事もせず

ウォンツは爽やかな笑顔で 「また是非一緒に出かけて下さい」と少し気障な仕草でティグの手の甲に軽くキスをした

デートと思うと気が重くなるが

一緒に食事をして過ごした時間は確かに楽しく快適だった

虎人は 一人部屋で化粧を落として着替えると

ベッドに大の字に寝ころんだ

今頃 聡史はあの女優と一緒にいるのだろうか・・・
聡史なら どんなエスコートをするのだろうか・・・
聡史はどんなレストランを選ぶのだろうか

ばかばかしい

第一 自分は本来 エスコートされる側じゃなくて
女性をエスコートする側の男じゃないか
張り合い方を間違えている

そう 判っているのに

なぜか ティグの姿でいる自分を聡史が構わないのが悔しかった
「ティグが好きだと言ってたクセに・・・」

虎人は目を閉じた

眠りに落ちる時 セーヌ川のほとりで聡史と交わした
熱いキスを思い出した

ティグは金髪のロングヘアを優しく撫でられて
聡史の腕に抱かれて

恋人同士のようにキスを交わした

虎人は 甘い口づけの夢を見た

相手が聡史なのか ウォンツなのか
顔をはっきり見ようとしたが判らなかった

虎人は深い眠りに落ちていった

3・虎人 デートに誘われる(後書き)

コメント・感想などお寄せ頂けると
今後の励みになります
よろしく願いいたします

4・虎人 対抗す

4・虎人 対抗す

「おはよう ティグっ！昨日はとても楽しかった ありがとう」

「おはよう ウォンツ こちらこそ ご馳走様でした ありがとう
楽しかった」

「ホントにつ？よかった 僕はあまり女の子と食事に行ったりした
事がなくて

退屈させてしまったんじゃないかとちょっと不安になっていたんだ」
「そんなこと・・・」

朝のロケ地 パリの街並みに焼きたてのフランクパンの香ばしい香
りが漂う

人懐こい笑顔でティグを待ちかまえていたウォンツは
片時も離れないぞという意気込みさえ感じさせる勢いで

ティグである虎人に寄り添い 話しかけ 微笑みかけ 並んで歩き
始めた

虎人は多少逃げ腰になりつつも 日本語がたどたどしいティグを演
じながら

ウォンツに応えていた

周辺視に聡史の姿を捜しながら・・・

（結城さん・・・いないのかなあ・・・ったく・・・）

心の中で秘かに舌打ちをした虎人に気づくハズもなく

ウォンツはひっきりなしに笑顔で何かを話しかけてくる

それに適当な相づちを打ちながら 虎人は聡史の姿を探していた

その時

「結城さあ〜ん こっちこっち！今日はあ エッフェル塔とかあ
あちこちでロケですよ 観光ですよ おいしいモノも沢山あります
よあ〜」

主演の若い女優が聡史の腕にまわりつきながらご機嫌な声でまく
し立てている

少し困惑したような 照れたような微笑みを浮かべながら

結城聡史が女優に引っ張られるようにしてやってるのが見えた

（……ちっ……） ティグである虎人は顔が軽く引き
つるのを感じた

しかし その瞬間 ティグはおもむろに まとわりつくようにしな
がら

話かけ続けていたウォンツに向き直ると 満面に極上の笑みを浮か
べた

「ウォンツ？今日も台詞のレッスンお手伝いしますね よろしく」
甘いハスキーボイスで囁くと ちらりとその視線を聡史に投げる

（……！……） 虎人の素晴らしくチャーミングなティグ姿
を視界に捕らえた聡史は

その挑戦的な視線に笑顔が凍り付いた

ウォンツの腕にしなだれかかるように身を預けながら

聡史に「ふんっ」とでもいいいたげな視線を向けてティグである虎人
は背を向けた

（……！何なんだ一体 虎人の奴……あの態度はっ……）

聡史には何がなんだかさっぱりと判らない

欧羅巴ロケに入ってからこっち 虎人とはろくに話もしていない

お互い 仕事に追われ一緒に過ごす時間もなく

そっこうするうちに 気がつけば虎人の側にはいつも必ず

ニコニコと人好きのする笑顔のウォンツ青年が寄り添っていた

そして 聡史の傍らにも共演のおちゃめな演技も魅力的な
なかなか実力派と言われる可愛い女優がいつも何かとくっついて
いた

聡史にすれば可愛い妹のような存在で
つつい甘やかした言動も出れば それなりの相手もせざるを得な
かった

しかし

それがなぜ 虎人であるティグにああまで露骨に無視される理由に
なるのか

聡史にはどう考えても思い当たるふしもなく
ただただ 呆然とその後ろ姿を見送るばかりであつた

（結城さん 可愛い女優さんにもてるからって鼻の下伸ばして・・・
けっ・・・

どーせ僕はこんな女装なんかさせられて 誰にも小林虎人だつてこ
とも知られずに
そうとも知らない男にいいよられて・・・ああー面白くないっ
！！）

一方の虎人にしても

自分のこのもって行き場のない怒りとも焦りとも悲しみともつかない
複雑怪奇な思いが何なのか 実のところよく判ってはいなかった
自分も可愛い女優にちやほやして欲しいのか

それとも ちやほやされている聡史を見るのが悔しいのか
はたまた 聡史を独占している女優への嫉妬心なのか

「ティグ？どうかした？」

「えっ？ ああ．．いいえ なんでも」

ウォンツに顔を覗き込まれ 虎人は我に返った

（結城さんがかまってくれないから．．腹がたつ??僕が??）
ふと心に湧き上がった思いがけない自分の気持ちに愕然とした

（そんな．．ガキみたいなこと．．）

「テイグ？ ホントに．．大丈夫？ 具合でも悪い？」

「．．いえ．．いいえ 大丈夫 ありがとう」

心配そうに自分の顔を見つめるウォンツに 虎人は力なく微笑んで
見せた

思いっきり背をむけて振り切ってきた聡史の事を思いながら．．．

5・虎人 夕暮れに涙す

5・パリの夕暮れに

「ウォンツ 本当に楽しかった ありがとう 食事とてもおいしかった」

「そう？よかったあゝ ティグはパリにも詳しいんでしょう？僕は何も判らなくて

スタッフの人にお店とか色々教えてもらっただ ティグに喜んでもらいたくて・・・」

「・・・ウォンツ・・・」

撮影を終えて ティグである虎人は今日もウォンツに誘われて夕食を共にしていた

洒落たレストランを出て 日が暮れかけてきた街並みを並んで歩いていた

「いや・・・その もしもし迷惑でなかったらんだけど・・・日本に戻ってからも

また 食事とか買い物とか・・・一緒に・・・その また会ってもらえないかな・・・僕と・・・」

「・・・ウォンツ・・・」

「あの 僕は その・・・今まで女の子と話をする事があまり得意じゃなくて・・・

とても好きな人はいるんだ・・・でも そのちゃんとした恋じゃないくて・・・

僕は女の子と恋愛ができないんじゃないかって・・・さすがに不安になったりもして

でも なんだかティグは普通の女の子と違って話しやすいというか・・・不思議で」

(・・・男だからなあ・・・)

「すごく魅力的で 可愛いのに・・・こう さっぱりしてて・・・とにかく」

僕は君の事が好きなんだティグっ！」

(・・・げっ・・・)

「ティグは ティグにはもう心に決めた男性がいるの？」

「えっ・・・」(・・・心に男性決めてちゃ・・・マズイよなあ・・・女性だろ僕だって・・・)

「君みたいに素敵な人に恋人がいないワケないけど・・・やっぱり・・・ダメ？」

「あ・・・あの その・・・」(恋人はいないけど・・・男だしなあ・・・僕も一応・・・)

「すぐに返事をくれなくてもいいんだ 考えておいて ね」

「ウォンツ・・・」

「わあゝ夕日がキレイだよティグ ロマンチックだねえ」

わざと話題と雰囲気を変えようとしているウォンツの様子がいたたまれず

虎人は思わずウォンツの言葉を遮った

「ウォンツッ！今日はありがとう ちよっと一人で行きたい所があるので

ここで失礼させてね また明日 撮影頑張りましょうね じゃあ・・・」

「あっ・・・ティグ・・・」

まだ何か言いたげに引き留めようとするウォンツをふりきり

虎人は夕暮れのパリを一人歩き始めた
本当のところ 行くあてなど何もない

ただただ ウォンツからの告白に応えられない自分と

何かが 魚の小骨がささったようにひっかかっている自分の心に
一人で向き合う時間が欲しかった

（・・・参ったな・・・告白させちゃったよ・・・参ったな・・・）
男である自分がウォンツに告白までさせてしまった事に虎人は罪悪
感を感じていた

適当な距離を保って ティグに必要以上の好意を持たれないように
そう気をつけて過ごすつもりだったのに

（・・・参ったな・・・告白させちゃったよ・・・参ったな・・・）

虎人はいつの間にか一人川辺のベンチに腰掛けていた

（はあゝっ・・・悪いことしちゃったなあ・・・ティグに惚れる男
がいるなんて

正直思いもしなかったもんなあ・・・ウォンツ 結構いい奴なん
だよなあ・・・

小林虎人として友達になりたかったよなあ・・・参ったなあ・・・
）

自分の思いに深く沈んでいた虎人は ふとベンチに並んで腰掛けた
人影に気づき

その顔をあげた

「・・・あっ・・・」

「やあ・・・ティグ どうしたの？こんな時間に一人でこんな所で」

「ゆ・・・結城さん・・・」

それは 夕闇にも柔らかく白く輝くような優しい笑顔の結城聡史で
あった

虎人の隣りに静かに腰を下ろした聡史が顔を覗き込む

虎人はその瞳を正面から見返す事ができず 思わずうつむき加減で
つぶやいた

「ゆ・・・結城さんこそ どうしたんですか こんな所に一人で・・・
のだめちゃんは

彼女は一緒じゃなかったんですか？」

「・・・彼女は今晚はスタッフの女性達と食事にでかけたよ」

「・・・へえ・・・結城さんでもふられる事あるんだ」

「・・・ふっ」 聡史が小さく微笑んだ

「何が可笑しいんですかつ！ バカにしたみたいに笑わないで下さいよ」

「バカになんかしてない・・・どうしたの？ ティグ・・・いや虎人」

「ベ・・・べつに何も 何でもないですよ・・・」

「・・・」

聡史の黒い大きな瞳にじっと見つめられて 虎人は口をへの字に尖らせた

「何でもないですよ・・・ただ ただティグがウオonzに告白されただけです」

「ティグが？」

「・・・」 聡史の問いかけに応えず 虎人は口を尖らせたまま俯いていた

「・・・！」 突然顎にかけられた聡史の手の暖かさに虎人は目をあげた

思いがけず目の前に迫っていた聡史の端正な顔に虎人は思わず目を伏せてしまった

次の瞬間 虎人の唇にふわりと暖かいモノが重なってきた

「んっ？」

それが聡史のふっくらとした唇だと気づくと 虎人は思わず聡史の胸元を突き放し

その口づけから逃れようともがいた

「・・・虎人・・・」

「なっ！ 何するんですか いきなりっ！」

「何って・・・ティグにキスを・・・」

「何でキスなんかするんですかつ！ どうしていつもそうやって僕をからかうんですかつ！」

虎人の瞳にうつすらと涙が滲んだ

自分でもなぜこんなにも聡史に腹をたてているのか

なぜ聡史の口づけから身をもぎはなしたのか

そして なぜ自分が泣いているのか

虎人はさっぱり判らなかった

ただ自分の心が果てしなく乱れている事に気づき

その乱れた心にたつ荒い波にもまれて 飲み込まれて

何が何だか判らなくなっている それだけがはっきりと判った

心配そうに覗き込む聡史の顔に 寂しげに切なげに見つめていたウ

オンの顔が重なる

自分はどうなってしまったんだろう・・・

虎人は聡史に背を向けて肩を震わせて涙を零し続けていた

6・虎人 涙の向こう側

6・涙の向こう側

「お嬢さん お一人ですか？こんな時間に一人は危ないですよ エスコートしましょう」

「結構です」

「そんなこと言わずに よかったらシャンパンでもご一緒して甘い一夜をいかがですか？」

「構わないでください」

「おー そのキツイ瞳が魅力的ですね 僕は一瞬で貴方の虜です」
「いい加減にして下さい」

「僕が素敵な夜をプレゼントしまーす」

てめえー いい加減にしろ うつとおしいって言ってんだよお こ
のうすらボケがあ

と 虎人がティグの猫かぶりをぬぎすてて 威勢のいい啖呵を切る
うとした瞬間

ティグである虎人の腕を掴み しつこく言い寄っていたフランス人
の肩を

ぐいつと掴み 虎人から引き剥がす人影があつた

「失礼 僕の連れなので・・・」

耳に心地よい低音の美声がきりりと響いた

「ちっ・・・」小さく舌打ちをするとしつこかった男性が背をむけて
去っていった

「一人は危ないって言っただろ・・・一緒に宿に戻るう虎人」

「ゆ・・・結城さん・・・」

川辺のベンチに聡史を置き去りにして 早足で立ち去った虎人を追ってきた聡史であった

人目をひくティグの姿はアムールの国フランスの男性が放っておくハズもなく

案の定 しつこくからまれて足止めをくらっていた

聡史に肩を抱かれるようにして 虎人はホテルへと戻った

「ティグっ！……あっ……」

「ウォンツ……」

ホテルのロビーでティグの帰りを待っていたらしいウォンツの姿に虎人は身を固くした

そんな虎人の肩を一層抱き寄せるようにして聡史がウォンツに穏やかに言う

「彼女 ちょっと疲れているようだから 僕が部屋まで送り届けるよ」

「あ……はい……」 ウォンツは虎人を見つめたまま力なく応える
虎人は小さく「おやすみなさい」とつぶやくと聡史に促されるに従ってロビーを後にした

背後にウォンツの視線を感じながら 虎人は肩に回された聡史の腕に身を任せていた

部屋の前で虎人は聡史の腕をふりほどいた

「ありがとうございます また明日……」

そう言つて 一人部屋へと入ろうとした虎人の身体を抱き締めるようにして

聡史はそのまま部屋へと入り扉を閉めた

「なっ……」

驚いて少しよろけた虎人を更に深くその腕の中に抱き締めると聡史はその耳元にとろけるような声で囁いた

「虎人……どうしたの」

「どうしたって……」 ムキになって聡史の腕から逃れようと
する虎人を抱き締め

うつすらと涙の跡の残る虎人の目尻に聡史はそっと口づけた
そして そのまま柔らかい唇をすべらせるようにして

虎人の頬へ そしてその唇へと口づけた

「んっ……」

深く抱き締められ 唇を塞がれ 甘い口づけを繰り返されて

虎人の思考は白くぼやけた

身体力が抜け 逃れようとものがくことを諦めた

ようやく聡史の唇が虎人を解放した時

虎人の口から長いため息が漏れた

「ぼ……僕……何が何だか……もう ぐちゃぐちゃですよっ!!」

「」

「虎人」

聡史に優しく抱き締められて

その 幾分自分より華奢な それでいてしっかりとした筋肉に覆わ
れた

聡史の胸に顔を埋め 虎人は溢れてくる涙を止める事ができなかった

静かに虎人の背中を撫でながら

聡史は虎人を抱き締め続けた

6・虎人 涙の向こう側（後書き）

ティグになってると いつもより「乙女」になっ
てしまう虎人（爆）何ででしょう
今しばらくお付き合い下さいませ
コメント・感想などお寄せ頂けますと
今後の励みになります
よろしくお願い致します

7・虎人 撃沈す

7・パリの夜

どの位たっただろうか 気がつくと虎人は聡史に肩を抱かれるようにして

ベッドに並んで腰をおろしていた

聡史は虎人の背中を優しくさすりながら しゃくりあげる虎人を黙って見つめていた

その大きな黒い瞳を縁取った睫が瞬きに併せて小さく震える

きれいだなあ 虎人はぼんやりとそんな事を思いながら彼を見つめていた

どの位 そうやって見つめ合っていたのだろうか

虎人の涙もしゃくりあげる震えもおさまった頃

彼の穏やかな声が囁いた

「虎人・・・どうして俺の事を避けてたの？」

「さ・・・避けてなんか・・・それは結城さんの方が・・・」

「俺？」

「彼女と・・・のだめちゃんといつも一緒にいて楽しそうだったし・・・」

「・・・虎人」

「ティグの事なんか眼中にないみたいだったし

し・・・仕事だからあたりまえだけど 仕方ないけど・・・でもせっかく欧羅巴・・・

一緒にまた来られたのに・・・全然話もできなくて・・・僕は僕で一生懸命やってたのに 裏目に出たって言うか・・・ウォンツにも悪い事しちゃったし・・・

もう・・・何が何だか・・・」

「虎人 俺はいつでも虎人を見てるのに ティグは俺の理想型だっ

て知ってるよな？」

「・・・だ・だって」

「俺だつてそりゃあ面白くなかったぜ ティグはウォンツ君専属の教育係みたいでさ

いつだつて彼がティグの側にいて とりつく島もなかったぜ」

「そ・そ・そんなこと・・・」

「ティグは・・・結城聡史の恋人・・・だろ？」

「へっ・・・」(そ・そ・そこまで断言されると・・・またちよつと違う様な気もしてくるんですけど・・・)

「虎人・・・いや ティグ ウォンツなんかに渡すつもりはないよ」

「ひゃ???」

再び 熱烈なキスに襲われて 同時にベッドに押し倒されて 呻いた拍子に開いた唇の隙間から聡史の舌が滑り込んできた 甘い口づけに 絡まる舌の感触に 虎人の思考回路はショート寸前になる

「・・・ううーりやあああ!!うおおいいっ!!やめんかいっ!!」

「・・・もお・色気がないなあ・虎人お」

「色気いうなあああ!!やめえいつ!!なんで押し倒すうっ!!」

「え?らぶしーんでしょ やっぱここは・・・」

しれっと言い返す聡史に言葉を失う

「・・・っぶ」

「・・・っぶっはっははは」

「はははははははは」

聡史と虎人 二人ほぼ同時に吹き出した
虎人の頭からブロンドのロングヘアのカツラをはがしとり
聡史が正面から向き合って静かに言った

「ウォンツ君にはティグのままちゃんとお断りをした方がいい
虎人だって知ったら彼はショックで立ち直れなくなるよ・・・
やっぱり男しか好きになれなかったのか　ってね」

「ああ・・・やっぱり結城さんもウォンツ君は小沼君の事をつて・・・
気づいてました？」

「そりゃあ　判るだろぉ・・・前の事件の時　そうだろうなって思
った」

「ですよね・・・」

「だから　ちゃんと女の子にも失恋できたって思わせてあげなくち
やな」

「ですかねえ・・・なんか複雑ですけど・・・」

「虎人のさあ　ティグがチャーミングすぎるんだよね（笑）」

「益々複雑なんですけど・・・」

「俺もティグちゃんに夢中よっ　首っただけ　大好きっ！愛してる」

「・・・うおおいっ・・・」

「あ・・・虎人らしくなった」

「・・・え・・・」

「いつもの虎人に戻ったね」

そう言つて　聡史は優しく微笑んで虎人の頭をてんと叩いた
「・・・ういっす・・・」

虎人は照れくさそうに笑って俯いた

その耳元に聡史が色っぽく囁き　耳朵を甘く軽く噛んだ

「化粧落として虎人に戻つてよ　俺は虎人もアイシテルよ」

「・・・うっ・・・」

虎人少年　一点集中の血液の流れに襲われ　やや前傾姿勢のまま
洗面所へと駆け込む事になった

恐るべし　フェロモン大魔王　結城聡史

まだまだ若い小林虎人少年であつた

若き虎人少年が化粧を落として戻った後のお話は・・・
また 別のお話（笑）

8・虎人 帰国す

8・そして帰国

結局 ティグは結城聡史演じる主人公がコンクールで優勝した際にトロフィーを手渡す美女の役でサプライズ出演を果たした

ウォンツ青年のフランス語はティグの指導のかいもあり

なかなかに見事な出来映えであった

撮影は厳しい日程の中 ハードなスケジュールながらも順調に進み無事 全ての行程を終える事ができた

全てのシーンを取り終えて スタッフ 出演者揃って打ち上げの夕食会が催された

その席でも虎人は 花井香の最新モデルのドレスに身を包み手慣れた化粧でティグになりきっていた

もう一人の主役であった女優もティグに興味津々で片時も側を離れようとしなかった

「ティグは背が高いねえー キレイだねえー いいなあモデルさん」

「・・・そんなこと・・・のだめちゃんだって可愛いですよ」

「やあだあゝっ！きやつきやつきゃ」

無邪気にはしゃぐ女優を相手に艶然と微笑むティグの姿を

聡史が優しい眼差しで見守っている

そんな聡史に気づいてか気づかずか ウォンツが聡史に声をかけてきた

「結城さん・・・結城さんとティグさんは随分親しいんですね」

「ん？ ああ 以前からの知り合いだし 仕事も何度か一緒にやつ

た事もあるからね」

「結城さんじゃ・・・かなわないな・・・やっぱり・・・」

ほとんど聞き取れない程の小さな声でつぶやいたウォンツに
聡史はわざと聞こえなかったフリをした

「え？何か言った？」

「いえ・・・何でもないですっ！」

「そう？」 気障な程にさり気ない笑顔でやり過ごす聡史であった

「ウォンツ・・・あのね・・・お話が」

ハスキーな声でティグがウォンツを皆から離れた会場の隅へと促した

「ティグ・・・」

「あの・・・あのね・・・その」

「いいんだ もういいんだ ティグ」

「え？」

「僕 これでも案外男らしい性格なんだよ 諦めもいいから安心してよ」

「・・・ウォンツ」

「君の心の中の人って 結城さんなんですよ？」

「え・・・いや・・・いえっ・・・それは・・・」

「いいんだ もういいんだ ティグ 何も言わないで」

「でも」(うおおいつ！それはちよつと違うからっ！！)

「彼も君の事 大切に想ってるみたいだし・・・僕は潔く身をひくよ」

「・・・ウォンツ」

「まあ 僕にもなんとなく一緒にいてくれる相手はいるからさ 心配しないで」

「・・・」(小沼か??小沼か?いいのか?それで??男でいいのか???)

「じゃあ これからも いいお友達の一人にはしておいてよね」

明るい笑顔で去っていくウォンツの背中を見つめながら

虎人は複雑な思いで一杯であった

「とーらーとーとー」

「うわっ・・・びっくりした・・・とらとって呼ばないで下さいよっ！」

いきなり至近距離で耳元に名前を囁かれ 飛び上がる程驚いた
ウォンツを見送ってぼおっとしていた虎人の隣りにいつの間にか
てきたのか

聡史が寄り添っていた

「じゃ・・・ティグ みんなが待ってるよ 一緒に飲もう」

「あ・・・はい 今行きます」

「彼にちゃんと話したんだね」

「ええ ちゃんと」

「ちゃんと俺が恋人だつて宣言した？」

「・・・うおおいつ！・・・」

唸るように睨む虎人に肩をすくめて聡史が片眼をつぶって見せる

「冗談です」

「・・・つたく・・・」

日を置かず 慌ただしくスタッフ一同帰国の日を迎えた

聡史はハードなスケジュールでそのままCMの撮影にタイへと飛び
虎人は一旦はティグとして帰国し その足で再び

今度は小林虎人として 結城聡史の仕事場へと付き人として駆け付
けた

冬を迎えた日本と違い タイは蒸し暑い夏そのものだった

「欧羅巴の寒さの次がこれじゃ 結城さん 体調崩さないで下さい
ね」

虎人の差し出した冷たい飲み物を受け取りながら聡史が笑いながら
応える

「大丈夫 案外俺はタフだからね まあちよつと体重は落ちたけどなあ・・・」

「ですよね・・・日本に帰ったら たらふく焼き肉喰いに行きましようね」

「だな（笑）」

「ですよ」

「なあ 虎人」

「はい？」

「やつぱ・・・ティグちゃんもいいけど 虎人といるのが楽しいな」
「はあ？」

「マジで」

「よして下さいよ 気味が悪いなあ」

「アイシテルよとらと」

「・・・うおおおいつ！」

二人が住み慣れた東京の部屋へと無事に戻れたのは
この後 まだ数週間の後でありました

「結局さあ・・・」

「はい？」

「虎人は 俺にかまってももらえなくていじけてたんだろ？」

「なんのことでしょう」

「欧羅巴でさ パリの川辺のベンチで一人で泣いてた」

「さあ・・・覚えがないですねえ」

「俺が抱き締めたらしやくり上げて可愛かったなあーティグちゃん」
「・・・うおおい」

「俺が可愛い女優さんと一緒にいてヤキモチ妬いたの」

「・・・うおおい」

「で 妙な対抗心燃やしちゃったら男にマジ惚れされちゃって」
「・・・」

「大変だったねえ 虎人くうくん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「素直に俺に 寂しいんですけど って言ってくれたらよかったのにねえ」

「・・・・・・・・殺す！」

「ひやああああ」

哀れ 結城聡史 つまらないからかいで虎人にちょっかいを出し逆鱗に触れる

この後 虎人による「砂漠のプロメテウス作戦」が敢行された事は言うまでもない

「ひやあゝっはっはっは や・・やめっ！脇腹はマジで勘弁してっ！ひやああはっはっは」

「許しませんから」

「きやあゝっはっはっはあああゝ」

「うりやああああ」

「はははははは・・・・・・・・はんっ」

「・・・・・・・・はんって・・」

もつれ合ってくんずほぐれずじゃれあつて

若い虎人クン ただで済むはずもなく

フェロモン大魔王の魅力に立ち向かえるワケもなく

「んんっ・・・・・・・・結城さんのキス・・・・・・・・エロすぎ」

「そお？」

いつもの二人 ずっと二人 いつまでも二人

そんな幸せな二人でありました

え？ この後の顛末ですか？

それは18禁（爆）

それはまた別のお話

おわり

9 パリの夜ゝあれから

9 . パリの夜ゝあれから

「化粧落として虎人に戻つてよ 俺は虎人もアイシテルよ」
「・・・うつ・・・」

虎人少年 一点集中の血液の流れに襲われ やや前傾姿勢のまま
洗面所へと駆け込む事になった
恐るべし フェロモン大魔王 結城聡史
まだまだ若い小林虎人少年であつた

若き虎人少年が化粧を落として戻つた後のお話は・・・
また 別のお話（笑）としましたので
今回は あのパリの夜のお話をいたしましょう

「ひゃあ・・・参つた・・・」
そそくさと化粧を落とし シャワーを浴びる
虎人はわざと少し冷ための湯を頭から浴びた
頭と一点集中の血液を冷やすため・・・

「結城さん お先に風呂頂きました 結城さんもどうぞ」
パウダールームから出てきた虎人は
いつものぶっすりとしたポーカーフェイスを取り戻していた
大きなタオルを腰に巻き
小さめのタオルで髪の毛をぐしぐしと拭きながら
虎人はホテルの部屋に備え付けられた
小さな冷蔵庫からミネラルウォーターを取りだした

「うん それじゃ俺も汗流してこよっかな」

「ういっす」

水をボトルから直接飲みながら 聡史を見送る

ほどなく パウダールームからは盛大なシャワーの水音が聞こえてきた

同時に聡史の声が

「虎人おー シャンプーなあいいー」と聞こえる

「ええーっ 置いておきましたよおーしょおがないなあ・・・」

虎人はパウダールームの鏡の前に置き忘れていたボトルをとるとシャワールームのドアをノックした

「結城さあーん 開けますよおーシャンプー」

「おおーっ さあんきゅー」

がちやつ・・・

「・・・!・・・」

虎人は 手にしたボトルをあやうく取り落としそうになった

湯気で曇ったガラスブースの中に背中を向けて立っている結城聡史
気持ちよさそうに首をゆっくりと回しながら頭からシャワーを浴び
ている

無駄のないほっそりとした後ろ姿

意外にもしつかりとした筋肉に覆われた肩から背中に

湯が弾けて流れる

しなやかに長い腕や細く長い首が丹頂鶴を思わせる美しさだ

輝く黒髪 艶めかしく湯を弾く真珠色の肌

背中にうつすらと残る火傷の跡

天使の羽の名残に思える尖った肩胛骨がしなやかに動く

驚くほど細い腰から 形の良い小さな尻が続く

引き締まった太股からすらりとした両脚へと湯が流れてゆく

虎人はしばし その姿に目を奪われその場に立ち尽くしていた

「・・・虎人？」

キュツと蛇口を捻る音がしてシャワーの水音が消えた

「・・・はっ・・・あ・・・あのシャンプー ここに置きますから！」

虎人はようやく固まってしまったような指でシャンプーをブースの側に置いた

そして慌ててパウダールームを後にした

「ひゃあ・・・同じ男とは思えないよな・・・あんなに綺麗なヒトがいるなんて・・・」

虎人は今しがた思いがけず目撃してしまった聡史の後ろ姿が脳裏に焼き付き

その透き通るような真珠色の肌に艶めかしく湯が弾けていた様子が思い出され

またしても身体中の血液が一点に集中してくるのをどうにもできなかった

「ヘタなグラビアアイドルよりエロいよな・・・実際・・・」

虎人は飲みかけの水を飲み干すと力なくベッドに倒れ込んだ

「・・・と・・・とらと？・・・寝てるの？ははは可愛い寝顔しちゃって」

聡史がシャワーを終えて出てきた時

虎人はベッドに俯せて穏やかな寝息をたてていた

ティグで丸一日を過ごすというのは

虎人にとってもなかなかない経験であり それなりに気も使い疲れる事なのだろうと聡史は思った

虎人の眠るベッドの端に腰を下ろすと

聡史は優しく 虎人の額に乱れた前髪をすいた

「んんっ・・・」 虎人が小さく唸ると仰向けにごろりと身体を捻った

無防備に唇もうつすらと開いたまま すうすうと寝息をたてている
「くつくつく・・・可愛いなあ・・・いつものでかい態度の虎人じやないみたいだな」

聡史は笑いを堪えながら虎人の寝顔を飽きずに見つめていた
虎人を起こさないように気をつけながら

そっと布団をめくり 虎人の隣りにもぐりこみ

自分と虎人の肩口まで布団を引き上げた

「おやすみ」

ちゅっ と軽やかな音を立てて虎人の頬にキスをすると
部屋の明かりを落とし 聡史も眠りについた

「・・・ん？・・あれ・・？あ・・結城さん・・・」

どの位の時間なのか 薄暗い部屋の中 ベッドサイドの時計を見る
2時を少し回っていた

身体の右側に重みと暖かさを感じ ふと虎人は目を覚ました
見れば 虎人の右腕にしがみつくようにして聡史が眠っている
まるで小さな子供がするように

子猫や小犬がすりよってくるような

無意識であるうが くすんと小さく鼻をならし

虎人のぬくもりを求めるように身体的位置をごそそと動かす
長い睫が白く小さな顔に深い影を落とし

まるでおとぎ話の眠り姫のように可憐で美しい寝顔だった

「結城さん・・・しがみついている（笑）子供みてえ・・・」

虎人はくすつと笑うと聡史がしがみついている方の左手で
そっと聡史の柔らかい髪を撫でてみた

聡史のふつくらと赤い唇がすぐ目の前にある

吸い寄せられるように虎人は聡史の唇に唇を重ねた

しつとりと柔らかく暖かった

しばし聡史の唇の感触を楽しんだ虎人は満足げな微笑みを浮かべ
聡史の額に口づけると小さく囁いた

「おやすみなさい・・・結城さん」

静かな夜だった

二人 寄り添い 抱き合うようにして深い眠りに落ちていた

虎人と聡史 どんな夢を見ているのやら

静かな夜が更けていった

10・東京の夜ゝあれから

10・東京の夜ゝあれから

「ひゃあゝっはっはっは　や・・やめっ！脇腹はマジで勘弁してっ
！！ひゃああはっはっは」

「許しませんから」

「きやあゝっはっはっはっはああゝ」

「うりやああああ」

「はははははは・・・・はあんっ」

「・・・はあんって・・」

もつれ合つてくんずほぐれずじゃれあつて

若い虎人クン　ただで済むはずもなく

フェロモン大魔王の魅力に立ち向かえるハズもなかった虎人の
二人の東京の夜のお話をいたしましょう

「んんっ・・・結城さんのキス・・・エロすぎ」

「そお？」

「エロい・・・」

「そお？」

「ものすごくエロい」

「そおかなあ・・・」

「脳みそが破壊される」

「はははは　何じゃそりゃ」

「でも・・・不思議ですよえ・・・」

「何が？」

「結城さんて・・・今までラブシーンらしいラブシーンってドラマでも映画でも あんまりやってないですよね・・・」

「えーっ 俺前バリしてケツ丸出しのシャワーシーンとかやってるぞ」

「それって どっちかっていうとサービスショットっぽいし・・・」
「はあっ？」

「すごい濃厚なキスシーンとか すごいベッドシーンとかってないですよねえ 結構 いい歳 なのに」

「虎人・・・今 いい歳 ってところに力込めたね・・・」

「えっ？ いや そ・・・そんなことないですけどね 実際 ねえ」

「そーかなあ・・・普通にラブシーンもやってきたつもりだけど・・・」

「結城さんの演じてきたラブシーンって 不思議にちつともイロっぽくなくて・・・

なんていうか・・・相手の女性に 押し倒されてる系？とか」

「なっ・・・」

「自分からのキスシーンなんてこないだの欧羅巴で2回目位？氷壁以来？？」

「そ・・・そんなことないっ」

「一番イロっぽかったのって 雪山で戦闘機の中で死んじゃう所あれ ほら西崎さんに抱きかかえられて息も絶え絶えっていうシーンヘタなラブシーンよりイロっぽかったし」

「なんですと??」

「不思議ですよねえ」 結城さんて 女性と絡むシーンになると途端に

色気がなくなるつつうか 反対に女優さんを喰っちゃうつつつうか 結城さん単体で演技してる時の方が断然色気ムンムンですもんね・・・

「・・・虎人・・・何がしたい・・・」

「えっ？いえ 別に何も・・・ただ こんなに普段フェロモン大魔神なのに

どーーーーーしてラブシーンがないのかなあゝって素朴な疑問です
もしかして 事務所的にNGとか？？結城さんの希望？？？」

「んなワケないだろっ！俺だってラブシーンやりたいわいっ！」

「ですよねえゝ エロ話も下ネタも大好きですもんねえ とりあえず正常な

青少年ですよねえゝ でも あれですね」

「なに」

「結城さんのセミヌードとかって やばすぎて放送禁止かもしれま
せんね」

「なんですと??？」

「一人で蕎麦すすってるだけで あれだけエロい俳優なかないま
せんしねえ」

「エロ・・・?」

「巨乳のグラビアアイドルよりやばいでもん

ダイナマイト級のフェロモン放出 真珠の玉の肌 なんて」

「・・・玉の肌・・・」

「女優さん相手にさつきみたいなエロちゅうーしたら訴えられちゃ
うかも」

「・・・訴えられる・・・」

「それでもって自分より綺麗な肌の俳優となんか共演したくないか
も」

「・・・共演したくない・・・」

「それでもって自分よりイロっぱい俳優なんてすごくイヤかも」

「・・・すごくイヤ・・・」

「それでもって撮影するスタッフも命がけかも」

「・・・命がけ??？」

「結城さんの あーーーーんな顔や こーーーーんな顔とか あー
ーんな声

ぜつつえつったい放送禁止だし 目の当たりにしたら即死！爆死！
瞬殺モノ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？結城さん？どーしました？？」

頭を抱え込み 長身を小さく畳み込むようにして体育座りしてしま
った聡史に

虎人は呑気な声をかける

11・東京の夜とその2

11・東京の夜〜その2

「……とおくらあくとおく前……俺にどんな恨みがある？」

「へ？恨み？」

「なぜそこまで俺を追いつめる!!」

「へ？僕何か結城さん追い詰めるような事いいました？」

「……とぼけるな」

「とぼけてません」

「……じゃあ確信犯か」

「何也」

「俺のどこが放送禁止であつ……！！！！」

「ぜんぶ」

[illegible]

「結城聡史のお色気シーンなんて18禁モノですから」

[illegible]

「万が一そんなシーン演ったら後が大変ですよ きっと」

[illegible]

「ボディーガード雇わないと襲われますよ 攫われますよ 拉致されて

好き放題されて 標本にされて 閉じこめられちゃいますよ」

[illegible]

「結城さん？」

聡史が力なくがつくりと頭をたれているのを覗き込む

「結城さん？」

「とらと・・・俺の俳優人生はこれからどうなるんだろうか・・・」

「

「へっ？」

「女優と絡めない俳優なんて・・・使い道もないよなあ・・・」

「はあ・・・」

「ラブシーンだって 正直虎人の言う通り今までそんなにハードなおファーがなかったんだよな・・・疑問にも思わなかったけど・・・」

「

「はあ・・・」

「それなりにこなしてきたつもりだったけど・・・」

「言われてみれば確かに・・・くんずほぐれずって・・・なかった

なあ・・・」

「はあ・・・」

「虎人なんかデビュー作のドラマでいきなり熟女相手の濃厚ベッドシーン

あったよなあ・・・」

「ありました」

「断言するなよお・・・余計へこむ・・・」

「・・・」

「・・・」

気まずい沈黙が流れた

ほんの軽い気持ちで感じたままの疑問を口にただけだった虎人は
思いの外に聡史が深く落ち込んでしまった事に少し動揺していた
どうしよう・・・こんなにへこませるつもりなんてなかったのに・・・

「結城さん・・・僕・・・す・・・すみません あの・・・」

やりきれずに 俯いている聡史の顔を覗き込むようにして

虎人が声をかけた

「僕・・・深い意味なんてなくて その ちょっと結城さんのエロちゅーに

勝ち目がなかったのが悔しくて ちょっとだけ意地悪な事言いました・・・

ごめんなさい・・・あの・・・ホントに 結城さんはすごくいい俳優さんだし

演技も上手いし 格好いいし いろんな表情持ってるし

何の心配もないっていうか・・・全然大丈夫っ だから・・・その「

必死で聡史のご機嫌を治そうと 気分をもり立てようと話し続けた

ちろっ・・・

聡史が横目で睨むように虎人に視線を投げてよこした

「・・・っう・・・」 思わず虎人の腰がひけた

それ程に 聡史の周囲には あの欧羅巴口ケで演じたキャラそのものの

「負」色のどす黒いオーラが渦巻いていた

「ゆ・・・結城さん？」

「ぐすんっ・・・」

「結城さん？」

「しくしくしく・・・」

「結城さぁーん（涙）ごめんなさいってばぁ・・・ねえ泣かないで「うっうっうっう」

「ねえ・・・結城さん？泣かないで？ね？」

虎人が聡史の髪をそつと撫で その顔を覗き込んだ

その時

「・・・んっ！！」

虎人はいきなり聡史の両腕に抱え込まれ その唇を塞がれた
そしてそのまま抱き締められ 深く口づけられた

「んんっ……っはあっ……」

ようやく解放された虎人は深くため息をつくと抗議の声をあげた
「なんですかつ！いきなりっ！！」

「仕返し」

「……うおおいっ……」

けけけけ と軽やかに笑う聡史からは先ほどの
どす黒い落ち込んだムードはかけらも感じられない

「……演技派ね……」 虎人は再度深いため息をついた

12・東京の夜ゝその3

12・東京の夜ゝその3

「いーもん 気にしないモン 俺は俺の俳優人生を歩むんだ！
俺のペースで 俺のやり方で 俺なりの道を進むんだっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いーもん 気にしないモン ラブシーンなくてもへーきだもん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつか俺の必殺エロちゅうーを仕事にいかしてみせるわいつ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

果たして

聡史のエロちゅうーが公共の電波に乗ってお茶の間に届く日があるのか
虎人にはとんと検討もつかない事だった

まず無理だろう

そう思った

制作サイドの都合というものもある

何より 相手の女優が嫌がるに違いない
いや

聡史との共演は嬉しいハズだし ラブシーン自体は大歓迎だろう
でも

いざ放映された時に 自分よりも美しく色っぽい男とラブシーンを
演じる事を

よしとする女優がいるとも思えない・・・・

「・・・・虎人？何考え込んでるの？」

今度は虎人が頭を抱え込んでいた そして呻くように呟いた

「結城さん……」

「へ？」

「僕……結城さんの あーんな顔やこーんな顔 誰にも見せたくないです」

「虎人？」

「僕だけが知ってる結城さんの特別な顔 誰にも見せたくないです」

「虎人……」

「必殺エロちゅうーも 誰にもして欲しくくないです」

「……っふ」 聡史は小さく笑うと虎人の頭を抱き寄せた

「虎人……ありがとう」

「結城さん？」

「お前なりの慰めだろ？ありがと 俺のエロちゅうは虎人だけだよ」

「……それもまた ビミョーな気分ですけど……」

「なんだよ……嬉しくないのかよ」

「……び……びみょーデスよ……実際」

「ふんっ」

「……っぷっ」 不服気に口を尖らせた聡史が可笑しくて虎人は思わず吹き出した

「僕 練習台にならいくらでもなりますから（笑）」

「いつかオファアがあるかもしれないラブシーンに備えて 過ごしましょう！」

「よっしやあっ！」

「よっしやあって（笑）結城さん……ちなみにどんなラブシーンやりたいんですか？」

「もろもろ……」

「……」

「エロいやっ」

「……」 あなたの存在自体がエロですからねえ……」

「そお？」

「はい・・・かなり」

「堂々巡りだね この話題」

「はい・・・せめて自覚だけして頂けたらよろしいかと・・・」

「俺はエロい」と

「はい」

「自覚しろと」

「はい」

「ふう〜ん・・・」

「ふう〜んって・・・」

「俺のどの辺りがエロいんだろうか？」

「・・・存在全部です」

「俺 エロの権化？」

「はい」

「言い切るなよ・・・世間では 癒し系イケメンとか爽やか系イケメンとか

いろいろ良く言ってくれてるじゃん・・・」

「無邪気にはんわかと爽やかに エロいんです」

「なんですと？」

「いつでもどこでも 艶っぽいというか色っぽいというか」

「・・・ふうん・・・」

「まっ いーじゃないですか なかなかないタイプですよきっと」
「・・・」

「僕は好きですよ 結城さん」

「・・・」

「フアンの人達だつてみんな そんな結城さんだつて判つてて
応援してくれてるハズですし 西崎さんとかメロメロだし ねえ
人気者じゃないですか はっはっは」

「わかった・・・もういい きりないし・・・」

「ゆっくり寝たらすつきりしますよ」

「うん」

「寝ましょ寝ましょ 明日も朝早いですからね おやすみなさい」

「虎人」

「はい？」

「一緒に寝よ」

「は？」

「練習」

「・・・うおおいつ！」

「嘘つきじゃん」

「今からですか？ 無理」

「じゃ 一緒に寝るだけ ね 虎人冷え性じゃん 俺の足あったかいよ」

「判りました おとなしく寝て下さい」

「はぁーい」

虎人の腕にしがみつくようにして身体をすりよせて

穏やかな寝息をたてはじめた聡史の無防備な寝顔を眺め

虎人は一人笑いを堪えるのに必死だった

面白いなあ・・・この人 不思議なヒトだ

何だかホントのところがよく判らなくて・・・それが魅力なのかな
格好良くて 大人なのに可愛くて

目が離せないよな・・・

聡史の額にそっと口づけると 虎人も静かに目を閉じた

12・東京の夜ゝその3（後書き）

「欧州紀行記」はこれにてとりあえず終了デス
奈良に想いをはせながら（爆）虎人クンと相談の上
またお目汚しにお邪魔したいと思います
その折りにはまたお立ち寄り頂けたらと思います
読んで頂いて ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185d/>

虎人少年 欧州紀行記

2010年10月9日20時59分発行